

旦那様は心配症

プロローグ

デートの約束をすると、三十分前には待ち合わせ場所において。場所や時間は、しつこいぐらいに何度も確認する。

外出先でなにが起こっても良いように、準備は怠らおそず。

まるで、映画に出てくる特別捜査官のように、周りの人を注意深く観察して、危険人物はいないかを把握はあくしておく。

私が好きになった人は、とっっても心配症な人でした。

第一章 高坂夫婦の事情

高坂直樹、三十四歳。営業部。
会社での通り名は、鬼の高坂。

極度の心配症のせいで行動は常に慎重を期しており、それゆえに周りの人間からは少し遠巻きに見られている。しかしながら、出世頭として販売マネジメント課の課長の座につき、次期部長のポストを目ざれている人物だ。

自分にも他人にも厳しいその姿勢から、彼は裏で『鬼の高坂』と呼ばれていた。
そんな彼は、今日も眉間に皺を寄せながら書類を睨み付けている。

「うわ。今日の高坂、いつにも増して機嫌が悪いなあ」

「なにかあったんですかね？ 会議で使う資料に不備があったとか？」

「いや、それならはつきり言うだろ。あれは多分、部長と喧嘩でもしたんだろうよ」

「ああ。あの二人、仕事のことになるかと熱くなりますもんね」

課員の会話を右から左に聞き流しながら、直樹は眉間を押さえ、ふーっと長息した。

その怒りを吐き出すかのような仕草に、課員たちは身体をビクツと跳ねさせる。

あまりの恐怖に顔を青くしている者までいた。

一方、そんな鬼の高坂の頭の中には……

(……今朝の麻衣子さんも可愛かった)

花が咲いていた。

麻衣子というのは、一か月前に結婚した彼の妻である。

おっとりとしたその性格を表すようなふわふわの髪の毛に、低い身長。

直樹の隣をちょこちょこ歩き回るさまは、まさに小動物のよう。

常に万全を期す直樹とは違い、どこか抜けている彼女は、彼の庇護欲を存分に掻き立てた。

彼女と結婚することになったときっかけは、三か月前。両親が勝手に決めたお見合いだった。直樹はこれまで、それなりにモテてきた。女性に困ったことなどほとんどない。

しかし今まで付き合ってきた人からは、その性格ゆえに、『束縛しすぎ！』『干渉しすぎ！』と最終的にはフラれてばかりだった。

それを見かねた両親が、カラオケ仲間だった麻衣子の両親と結託をして、互いの子供たちをくっつけてしまおうと、勝手にお見合いを企画したのである。

当然、最初は気乗りしなかった。

恋愛しているより仕事をしているほうが数倍楽しかったし、そもそも女性そのものにあまり興味がもてなかったからだ。

なんなら、このまま一生独身でもいいと思っていたぐらいである。

しかし、両親の顔を立てないわけにもいかず、直樹はお見合いに参加した。

そこで、同じように無理矢理連れてこられたような顔をする麻衣子と会ったのである。

麻衣子と会った瞬間、直樹は驚きで声が出なくなつた。

また、麻衣子も同じだったようで、二人は声も上げず、その場で見つめ合ったまま固まってしまった。

実は二人が会ったのは、その時が初めてではなかつたのだ。

遡ること数か月前。一月のある寒い日のこと。

妹に頼まれて立ち寄つたとある雑貨屋で、直樹は麻衣子と出会つた。

店員としてカウンターのいた彼女は、スツ姿の男がいきなりファンシーな雑貨屋に入つてきて驚いたのだろう。直樹を認めるとびくりしたように目を瞬かせた後、柔らかに表情を崩し『いらっしゃいませ』と微笑んだ。

それを『可愛いな』と思つたのが最初だった。

県外に住む妹に頼まれてその雑貨屋に立ち寄つたのは、初めてではない。二か月に一度ほどの頻度で顔を出していたのだが、麻衣子を見たのはそれが初めてだった。

直樹はその日から自らの意思で雑貨屋に立ち寄るようになった。

別に欲しいものがあったわけではない。

ただ、彼女の柔らかな雰囲気^{やわ}に癒されたくて、三日にあげず通つていた。

直樹は雑貨屋を訪れると、一、二品ほど商品を買つて、プレゼント用に包んでもらう。

そうすると、会話をする時間が長く確保できるからだ。

特に話したいことがあつたわけではないし、共通の趣味があるわけではないので話題がなくなり困ることもあつたが、いつでも優しく話を聞いてくれる彼女に直樹は毎回癒されていた。

彼女のちよこまかとした仕草を愛おしく思いながら、ペットなどを飼つたらこんな気持ちなのだろうかと、当初はそう思つていた。

買った物は一部を除き、大体県外に住む妹に送つていた。いきなりプレゼントを贈り始めた兄を訝しみながらも、彼女はとても喜んでた。

そんな温かな日常が終わりを告げたのは、出会いから一か月ほど過ぎた頃。多忙だった仕事が一段落して、一週間ぶりに雑貨屋を訪れた時だった。

訪れた直樹を出迎えてくれたのは、麻衣子ではなく別の人間だった。

話を聞けば、麻衣子は本来この店の店員などではなく、怪我をした友人のために怪我が回復するまで店番を手伝っていただけだったらしい。

『なにかありましたか？ 言つてでもしましょうか？』

そう言ってくれた彼女の友人の申し出を断り、直樹は家路についた。

彼女に会えず、いつもより気落ちしている自分を目の当たりにし、その時初めて直樹は自分の気持ちを知ったのだ。

だから、再会した時は本当に驚いた。

麻衣子も覚えていてくれたようで、互いの両親が驚くほどすぐ意気投合した。

出会いがお見合いだったので、二人の結婚話はとんとん拍子に進み、そうして気がついた時には、嬉しくもこういう形に収まっていたのである。

現在は三か月後の結婚式に向けて、準備を進めている最中だ。

夫婦にはなったが、直樹と麻衣子はまだ出会って一年も経っていない。入籍したのはほんの一月前だ。

相手のなにかもを知っているとは言い難い関係だった。

それに、実はまだ身体を重ねてもいない。

直樹としては、すぐにでも……という気持ちはあるのだが、結婚式を三か月後に控えた今、彼女を妊娠させてしまうわけにはいかない。

普通なら避妊具を使えばいいと思うところだが、そこは直樹の心配症な性格が邪魔をしていた。

(避妊具の避妊率も一〇〇パーセントというわけではないですし、もし万が一にでも妊娠させてしまったら大変ですからね。ドレスの採寸もやり直しですし、悪阻などで結婚式に出れなくなってもいけませんし……)

つまり、彼はセルフお預け状態を自ら作り出していたのである。

また、麻衣子もそういうことに関して積極的ではないため、夫婦でありながらキスすらもしていないという、なんとも奇妙で面白い関係ができてしまっていた。

ちなみにキスをしていない理由は、それだけで止まる自信がないという直樹の都合によるものだった。

「高坂！」

険しい顔で麻衣子との出会いを思い出していると、急に背中に衝撃が走った。

背中を平手で叩かれたとわかったのはその数秒後だったが、それよりも前に叩いた人物に思い至る。

「香川……」

唸るようにそう言いながら振り向くと、香川はわざとらしく自身の身体を抱き込み、身震いを見せてみた。

「やあん。高坂こわーい」

香川は直樹の大学生時代からの友人で、会社の同期である。

学生時代からピリピリとした雰囲気でもう人に寄せ付けなかった直樹に対して、唯一めげないで話しかけてきたのが彼だった。

就職先が同じだったことには驚いたが、彼はどうやら狙っていたようで『いやー、友人がいるほうがいろいろと楽じゃん?』と笑っていた。

穏やかな気性と明るい性格のおかげで、彼は『鬼の高坂』に対して『仏の香川』と呼ばれており、現在は営業二課の課長をしていた。

「なんだよ、そんな睨むなよー」

「なにか用ですか?」

「なにつて、昼飯の誘いに来たんだろうが」

「昼?」

見回せば、もうフロアにはほとんど残っていないかった。

「もう五分も前に昼休憩のチャイムが鳴ったぞ。もしかして気がついてなかったのか?」

麻衣子のことを考えすぎていてチャイムに気がつかなかったとは、さすがに言えない。

しかしながら、書類のチェックは終わっているし、午前中のうちに出しておきたかったメールもきちんと出している。

午後の仕事に差し支えるほど、意識は飛ばしてなかったということだろう。

「今日は食堂にするか? 外で食べるか?」

香川の言葉に、直樹は立ち上がる。

「ちようどいいですね。明日、芹沢コーポレーションの方がウチに来られるので、昼を食べつつ、その最終確認をしておきましょう。……担当は君ですよ」

「正確には、うちの若林だけだな。俺は新人のフォローに入るだけで……」

「なら、実質君が取り仕切るんでしょう? 安心してください。若林君にも後から話しておきます。うちの課からの引継ぎですからね。完璧にやっておいて損はないはずですよ」

香川はあからさまに嫌な顔をした後、「この心配症男め」と小さく毒づいた。



その頃、高坂直樹の妻——高坂麻衣子は、友人である富谷結花とカフェで待ち合わせをしていた。「ごめんね、こんなところまで呼び出しちゃって」

約束の時間びつたり待ち合わせ場所のカフェに現れた結花は、そう言いながら頭を下げた。

結花は小学校から付き合っている麻衣子の幼なじみで、今も親友だ。

「私のほうは大丈夫だよ。結花ちゃんこそお店、大丈夫?」

「平気、平気！ 最近はアルバイトぐらいなら雇えるようになったからね。お取引先との打ち合わせも大切な仕事だし。麻衣子のアクセサリーって評判良いからさー」

幼い頃からお洒落しゃれな物が好きだった結花は、現在市内に雑貨屋を開いていた。そう、麻衣子と直樹が出会ったのが、その雑貨屋である。

麻衣子はその雑貨屋みずかに自らの作った商品を卸おろしていた。

……と言うのも、麻衣子はハンドメイド作家なのだ。

作っている物は幅広く、定番のレジンで作ったアクセサリーから、鞆かぼんや財布などの布物。マスクングテープなどのステーションナリーや食器などのデザインもしている。

彼女が作る物に共通しているのは、そのどれもに鳥があしらわれている点だ。

インコやオウム、スズメやヒヨコ。過去にはフクロウやクジャクなんてものもデザインした。

この間、受注生産した妊婦用の腹巻はら巻きに、コウノトリをあしらったところ、その可愛らしさから追加でいくつも注文が入ったほどだった。

麻衣子で作った商品は、その可愛らしさとデザイン性の高さから人気が高く、自らのホームページや専用のアプリでも販売しているが、どれも売り切れ状態が続いている。

普段は自宅で作業をしていることが多い麻衣子だが、たまにこうやって結花と打ち合わせをすることもあるのだ。

「今日は秋冬の商品の打ち合わせよね？」

「うん。結婚式の準備もあるのに悪いと思っただけど、うちのお客さんも結構期待してて。この前なんか『モーリスさんの秋冬の新作、楽しみにしてます！』って直接言われちゃって……」

結花は申し訳なさそうに眉根を寄せた。

ちなみに『モーリス』というのは麻衣子のハンドメイド作家としての名前である。

誰もが知る童話『青い鳥』を書いた、モーリス・メーテルリンクからきている。

「そう言ってもらえるのは嬉しいし、結花ちゃんのところの商品置いてもらえるの助かってるから、大丈夫だよ。結婚式の準備と並行して頑張る！」

「本当にごめんねー」

「大丈夫だって！」

平謝りする結花に、麻衣子はいつもより元気な声を出した。

そして、いたずらっ子のように笑う。

「その代わり、結婚式でのスピーチよろしく！」

「それは任せる！ いや、任せてください!!」

元気の戻ってきた結花は胸を叩く。そんな彼女に麻衣子は「お願いね」と笑うのだった。

そのまま二人で、納品する商品と個数、デザインについて話し合った。

秋冬の新作にあしらう鳥はゴジュウカラとシマエナガにする予定だ。

ゴジュウカラは目のあたりに黒い線がある小さな青い鳥で、シマエナガは「冬の妖精」ともよばれる白いもふもふとした愛くるしい鳥である。

「ところでさ、結婚式のドレスとアクセサリー。自分で作る予定だつて、なつきから聞いたんだけど。ほんと?」

話し合いが終わり、後はのんびりとお茶しようというところで、結花はそう切り出してきた。なつきというのは、一年前に電撃結婚をした、二人共通の友人である。

あのおつとりとした彼女が医者と結婚したというのも驚きだし、すぐに子供ができたと聞かされた時には度肝を抜かれた。

「うん。一生に一回のチャンスだからさ。絶対にやってみたくて! 小さい頃からの夢だったんだ! ……正直、作るほうがお金も時間もかかっちゃうんだけどね」

「すごいわあ、なにそのバイタリティ。あの旦那さんはどう言ってるの? 結婚式まであと三か月しかないでしょ?」

『麻衣子さんが納得できるようにやってください。間に合わなかった場合のドレスはこちらを用意しておきますから』って

「相変わらず、用意周到ねえ」

結花は呆れ半分、感心半分という顔で息を吐いた。

直樹と結花は数度会っただけだが、彼女は、彼の時間を異様に気にする様子、物事においての慎

重さを目の当たりにして、彼の性格をなんとなく理解していた。

「まさか、自分の店が友人夫婦の出会いの場になるとは思わなかったわねー」

「あはは。その節はお世話になりました」

「なに言ってるの! お世話になったのはこつちよ! あの時本当にありがとうね。まさか新年早々事故に遭うとか思わなくて……」

「あの時は、ほんと大変だったよね」

当時のことを振り返りながら二人は笑う。

「でもなんか、麻衣子がああいう人と結婚するとか、ちょっと意外だわ」

「なんで?」

「いや、麻衣子って結構のんびり系で、それでいて行動するとなったら直感で決めるタイプじゃない? だから、ああいう人を選ぶって思わなくて。タイプでいったら、二人って真逆でしょ?」

「まあ、確かに」

現在、直樹と麻衣子は仲良く暮らしているが、日常での考え方が一緒かと聞かれれば、首を横に振らざるをえない。

それなのに二人がまったく喧嘩をしないのは、互いに争いを好まない性格なのと、麻衣子がおつとりなのが理由に挙げられる。

(それに、なんだかんだいって、直樹さんが譲ってくれるんだよね)

新婚だからか、元々そういう性格なのか、直樹は麻衣子に甘い。

心配症な性格ゆえにいろいろ言ってくることもあるが、麻衣子がそれを嫌がれば、強制するようなことはしないのだ。

「で、どうなの？ 直樹さんとはうまくいってる？」

『うまくいってる』って？ うん。いい感じだよ。いい人だし、いろいろと気遣ってくれるし……」

「そうじゃなくて。……夜のほうとか」

結花の言わんとしているところがわかり、麻衣子は口に含んだコーヒートを噴き出しそうになる。

それをすんでのところで押しとどめ、飲み込む。

咽る麻衣子に、結花は目を瞬かせた。

「え？ まさか、してないの？ 寝室は一緒なんですよ？」

「それは、そうだけど……」

熱くなった頬を隠すように、視線をそらした。

寝る時の部屋は一緒だが、本当に一緒に布団で眠るだけで、直樹は麻衣子に指一本触れてこない。

「初めてってわけじゃないんだし。もったいつけなくてもよくない？」

「別にもったいつけてるわけじゃないし。それに……」

麻衣子はそのまま、またコーヒートを飲んだ。妙な沈黙が落ちる。

その歯切れの悪い言い方をする麻衣子を見て、結花は眉を顰めた。

「え。初めてとかじゃないよね？」

「……別に、どっちでもいいでしょ」

麻衣子の反応に確信を持った結花は、大げさに声を上げた。

「え、本当に!？」

「ちよっと、声大きいって!」

慌てて自らの口に人差し指を当てる。

すると、結花ははっとした表情になり、あたりを見回した後おとなしくなった。

「でも、麻衣子って高校生の時、年上の人と付き合ってた？」

「まあ……」

「なにもなかったの？」

『なにもなかったの?』って。その時、私高校生だよ?」

高校生の頃、麻衣子は六歳年上の大学院生と付き合っていた。

名前は湯川昂史。

彼は同級生のお兄さんで、その子の家に遊びに行くうちに仲良くなり、付き合うようになった。

当時は六歳年上というだけですごく大人に見えたとし、そんな大人な男性と付き合っているというだけで鼻が高かった。今思い返せば、本当に馬鹿な話だが……

麻衣子の言葉に、結花は首を横に振った。

「いやいや。高校生なら十分にあり得るって。それに、麻衣子は高校生だったかもしれないけど、相手はそれなりに年上だったんでしょ？」

「まあ、六歳も上だったからね」

「それなのに、なにもなかったわけ!?」

「いや、付き合った期間、三か月もなかったし!」

そうは言うが、実はなにもなかったわけではない。

キスはしたし、押し倒された。

そういう雰囲気になったこともある。

しかし、とある理由で麻衣子とその彼氏は最後まで致すことなく、押し倒された翌日に別れることになった。

そして、その出来事がきっかけで、麻衣子は男性とそういう行為をすることに躊躇ためらいが生まれてしまったのである。

興味がないわけではない。

ただ、そういうことをするのに積極的になれない事情ができてしまったのだ。

なので以来、誰とも付き合えなかったし、付き合いおうとも思わなかった。

だから直樹とのこの距離は、逆にありがたくも感じていた。

「まあ、麻衣子はある程度そういう欲なさそうでもないね」

なにも知らない結花はそう言うのと、頼んでいたケーキにフォークを刺した。

「でも、直樹さんはしたいかもよ」

「ええ!？」

「だって、結婚する前に『絶対エッチなことはしません』みたいな約束はしてないわけでしょ？」

「そうだけど……」

「それともなに？ 直樹さんと、そういうことをするのが嫌なわけ？」

「そういうわけじゃないんだけど……」

頬が熱くなる。

——ぐっと近づいてくる熱い胸板。

いつもは眼鏡の奥に隠れている、切れ長の目。

身体を這はう、冷たい指先。

結花の言葉に思わずそういう想像をしてしまい、麻衣子は顔を上げられなくなった。

「それなら、心の準備、しといたほうがいいかもね」

「心の準備、つて言われても……」

麻衣子はそう零しながら、頬の火照ほてりを冷ますように、顔の前で手をパタパタさせた。

その日、直樹はいつも通り夕食前に帰ってきた。

どちらが食事を作るとは決めていないのだが、大体、家にいる時間の長い麻衣子が食事作りを担当していた。

あとの洗い物は、作らなかつたほう——直樹の担当である。

その日のメニューはそうめんと玉ねぎと山菜の天ぷら。それと、トマトのサラダである。

そうめんは直樹宛にお中元でたくさん届いたものだった。

食事中、麻衣子は箸を宙に留めながら呆けていた。

頭をめぐるのは昼間の結花の言葉。

『それなら、心の準備、しといたほうがいいかもね』

そう言われると、少し構えてしまう。

(もしかして、直樹さんはそういうことしたいのかな……)

今まで考えなかつたわけではないが、直樹があまりにも自分に手を出してこないの、彼も今の状況が心地良いのだと考えてしまつていたところはあつた。

しかし、もし彼が求めてくれるのなら、麻衣子だつてやぶさかではないのだ。

自分から求めるのは、恥ずかしさや過去の出来事も相まつて躊躇してしまつたが、彼が一言『したい』と言つてくれれば応じる気ではいる。

というか、好きな人に求められること自体は素直に嬉しいのだ。

それに、彼ならばちゃんと受け止めてくれるのではないかという期待もある。

そんなことを考えながら麻衣子は、ぐるぐるとそうめんのつゆを掻き混ぜた。

器の中で回る薬味を見ながら、麻衣子は物思いにふける。

(直樹さんは私とそういう……いやいや！ なんか、それはない気がする！ そりゃ、男の人だし、そういう願望がまつたくないわけじゃないんだらうけど。直樹さん淡泊そうだし。恋愛に興味とかあんまりなさそうだし……)

「……いこさん」

(一か月一緒に暮らしてきたけど、まったくそんな気配なかつたし。なんなら、触れるのさえ躊躇つてる節があるし!!)

「ま……いこさん」

(でも、これからずつとこのままつても多分ないよね。どこかでそういうタイミングはくるわけ、どちらにしても心の準備は——)

「いこ……さん——麻衣子さん！」

耳に届いた声に、麻衣子はと顔を撥ね上げる。

「はっ！ すいませんボーッとしました！」

「大丈夫ですか？ 熱でもあるんじゃない？」

心配そうな顔で、直樹は麻衣子の額に手を当てた。

ひんやりとした手のひらが、火照^ほった顔に心地がいい。
麻衣子は困ったように笑い、頭を下げた。

「大丈夫です。すみません、心配させて……」

「いいえ、大丈夫ならいいんです。でも、なにかあつてからでは遅いですからね。念のため、救急病院に行つておきますか？」

「行きませんよっ!？」

救急病院という単語に、思わず声が大きくなった。

「しかし……」

「こんなことで働かされたら、お医者さんが可哀想です」

「でも、万が一ということも……」

「億が一でもありません!」

心配症も、ここまでくると困りものだ。

直樹は麻衣子の答えを受けて立ち上がり、彼女の椅子のすぐそばまでやってきた。

「そうですか。それでは……」

箸を取られ、机に置かれる。

なにをするのかと見上げていると、彼は突然、麻衣子を抱き上げたのだ。

いわゆる、お姫様抱っこというやつである。

「ひゃあっ!」

突然の出来事に、麻衣子は思わずひっくり返った声を上げてしまう。

落ちないようにと彼の首に腕を回すと、彼は膝裏と背中に回していた腕を、しっかりと自分に引

き寄せた。

ぴつとりと身体がくっついて、どぎまぎしてしまふ。

直樹はそのまま麻衣子を寝室まで連れていく。

「今日はもう寝て、ゆっくり治してください」

「ちよつと、ひ、一人で歩けます!」

「ダメです。熱でふらついて、転^こけてはいけませんからね」

「転^こけません! 熱もありません!」

本当に心配しすぎだと声を上げると、彼は首を捻^{ひね}った。

「そうなんですか? おかしいですね……」

彼は麻衣子の身体をぎゅつと自分のほうに寄せた。

額^{ひたい}同士がぴつたりとくっつく。

「熱はあるようなのに……」

その瞬間、血が沸騰^{ふっとう}した。

喉がカラカラに渴き、全身から汗が噴き出した。

いつも冷静沈着で涼しい表情をしている彼の顔も、少し赤く見えるのは気のせいだろうか。

「こ、これは直樹さんが――」

「俺が？」

「なんでもないです！」

「教えてください。俺が原因なんですか？」

「原因じゃないです!!」

詰め寄ってきた顔を押しつけて、麻衣子はこれ以上顔を見られないようにと、ぎゅっと彼の身体に抱き着いた。

そうして、麻衣子はなけば無理やりベッドに寝かされたのだが……

「三十六度七分。微熱ですかね」

「平熱ですよ」

体温計を見ながらそう言う彼に突っ込みを入れつつ、麻衣子は布団を鼻までかぶった。

「でも、平熱にしては少々高い気もしますが」

「それは……」

直樹のせいだと言いつつになつたのを呑み込む。また先ほどのやり取りを繰り返すつもりはない。

直樹はベッドのふちに腰かけながら、麻衣子の頭を撫でた。

その顔には、珍しく笑みが浮かんでいる。

「しっかりと寝て、治してくださいね。風邪は万病のもとと言いますから。……なにか欲しいものがありますか？」

ありません、と口にしかけたその時、また麻衣子の脳裏に昼間の結花の言葉が蘇ってきた。

『でも、直樹さんはしたいかもよー』

麻衣子だって、キスぐらいはしたいと思ってる。

彼から直接気持ち聞いたことはないが、結婚したのだから一応は両想いだろう。キスぐらいはねだってもいいはずだ。

麻衣子はうつむきながら直樹の袖を引く。

「あ、あの。じゃ、おやすみの……キ、キスが欲しいです」

最後のほうは、小さすぎて聞き取れないぐらいの声しか出せなかった。

麻衣子が視線を上げると、直樹は驚いたような顔で固まっていた。蚊の鳴くような声だったが、どうやらちゃんと届いたらしい。

直樹は険しい顔で逡巡した後、躊躇いがちに麻衣子の頬を両手で包んだ。

「仕方が、ないですね」

上を向かされて、麻衣子は目をぎゅっと閉じた。

真っ黒になった視界で、心臓の音だけがやけにうるさく響く。

キスをするのは初めてではない。けれど、まるで初めてののような緊張感で麻衣子の身体は硬くなった。

直樹の顔が近づいてくる気配がする。唇に彼の吐息を感じて、唇が震えた。

しかし、彼の気配はすぐに唇から遠ざかり――

次の瞬間、おでこに柔らかな感触を得た。

(え?)

ちゅっと、軽いリップ音が寝室に響いて、彼の気配が遠くなる。

麻衣子は目を開けた。すると、直樹はもう扉の前で、ドアノブに手をかけていた。

「えっと、あの……」

「麻衣子さん、おやすみなさ〜」

「あ、はこ」

完全に気の抜けた返事をしてしまう。

直樹はまるで逃げるように、そそくさと部屋を後にしてしまった。



(危なかった……)

直樹は廊下に出た後、寝室の扉の前で顔を覆っていた。

ねだられるままに唇にキスをしてしまったら、どうなっていたかと思うとぞっとする。

直樹だって、直前まではキスだけなら大丈夫だろうと思っていた。

しかし、彼女から漂うシヨコラのような甘い香りに、一瞬だけ『このまま最後まで……』と理性が飛びそうになったのだ。

それをすんでのところで押しとどめ、額に唇を落とした。

麻衣子はびっくりしていたが、額だろうが唇だろうがキスはキスである。

「頭でも冷やしてきますか」

そう呟いてから直樹は風呂場へ向かった。

本当に体調が悪かったのか、ずいぶん遅くまで寝てしまったようだ。

翌朝起きた時にはもう直樹の姿はなかった。

窓から覗く日は相当に高い。昼前といったところだろう。

「直樹さん、起こしてくれても良かったのに……」

麻衣子はベッドから起き上がる。

朝食も基本的には麻衣子が多が多い。

作らなくても別段文句は言われないし、逆に作ってくれている時もあるのだが、なんとなく今日は自分が作りたかった。

昨日そのまま寝室に連れていかれたので、身を綺麗にしようとシャワーを浴びる。

風呂から上がり、リビングの食卓テーブルを見ると、彼が作った朝食が並んでいた。

そして、隣には見知らぬ茶封筒が一つ。

「え？ これ……」

麻衣子は封筒を開き、中身を確認した。中には、よくわからない資料と契約書の雛形のようなも

のが入っている。

「これって、確か昨日、直樹さんが見てたやつだよ……」

夕食の準備をしている時、直樹はこの書類を見ながらぶつくさとなにか独り言を呟っていた。

麻衣子が尋ねると……

『これですか？ 明日、打ち合わせで使う資料の確認をしていたんですよ。何度も確認をしたので大丈夫だとは思っていますが、一応』

と言っていた。

『明日使う』って、今日使うってことだよな!? え。でも、直樹さんに限って忘れ物とか。まさかそんな……』

人一倍心配症な彼が、打ち合わせで使う資料を家に忘れるなんてあり得ない。

そう思う傍らで『本当に忘れ物だったらどうしよう』と心配をする自分がいた。

とりあえず、麻衣子は直樹のスマホに電話をかけてみる。しかし、仕事の最中だからかは出なかつた。

（届けに行ったほうが良いかな？ だけど、余計なお世話だったらどうしよう。……でも、これがなくて困ってたら……）

河童の川流れ。弘法にも筆の誤り。天狗の飛び損ない。

普段から細心の注意を払って生活している直樹でも、忘れ物をする時はあるだろう。それがもし

かしたら今日なのかもしれない。

幸いなことに、二人の暮らすマンションと直樹の勤めている会社は、比較的近い。三十分と経たず会社にたどり着けるだろう。

「私が直接会わなくても、フロントに渡しておけば良いし。私の勘違いなら、それが一番だもんね！」

麻衣子はずけたばかりのエアコンを切って家を出た。

会社のロビーに着いた麻衣子は、ちょっと泣きそうになっていた。

「あ、あの！ これを直樹さんに渡してもらえれば良いだけなんですけど」

「すみません。社の規定により、どなたかわからない方の個人的な書類は受け取れないことになっています」

「えっと。だから、私は高坂直樹の妻で……」

「今、本人を呼んでいますから、少々お待ちください」

「ええ……」

こんなことになるのなら、来るんじゃないかと、麻衣子は後悔していた。

(どうしよう。このままじゃ、直樹さんの邪魔になっちゃう……)

直樹の仕事が忙しいのは、麻衣子も知っていた。

彼は毎日きちんと夕食時までには家に帰り、一緒に食卓を囲んでくれる。しかし、夕食を食べた後はいつも持ち帰りの仕事を始めてしまうのだ。

それが終わるのは、いつも日付が変わる手前。

家にまで仕事を持ち帰らなくてはならない直樹だ。こんなふうに呼び出して手間を取らせたくない。

「麻衣子さんっ！」

内線と呼ばれたのだろう。正面のエレベーターが開き、直樹が駆け寄ってきた。その顔は明らかに麻衣子のことを心配している。

麻衣子はますます申し訳なくなり、縮こまった。

「どうしたんですか、こんなところまで来て」

「あ、あの。書類を届けたくて……」

麻衣子は抱えていた茶封筒を、おずおずと手渡す。

直樹は茶封筒の中身を確認すると「ああ」と声を漏らした。どうやら事態は呑み込めたらしい。

「直樹さんに限って忘れ物なんてするはずないと思っただけで、万が一ってこともあるから……。それに、今日必要だったらどうしようって心配になっちゃって。……もしかして、いりませんでしたか？」

「はっ」

簡潔なその返事に、麻衣子は頭の上に金盥が落ちてきたような衝撃を受けた。直樹は続ける。

「これは原本ではないんですよ。家で確認をしようと思ってコピーして持ち帰ったんです。紛らわしかったですよね」

「そ、そうだったんですか。すみません……」

(なんだか泣きたくなってきた……)

そそっかしい自分を殴りたい。

うつむく麻衣子の頭を、大きな手が撫でた。

見上げると、優しく微笑む直樹の顔がある。

「謝らないでください。俺のことを心配して届けてくれたのでしょうか？ その気持ちだけで嬉しいですよ。ありがとうございます」

「でも、お仕事の邪魔しちゃって……」

「大丈夫です。ちょうど昼休憩に入ったところだったので」

「……それはまずまず申し訳ないです」

直樹はフォローのつもりで言ったのかもしれないが、『仕事の邪魔をしてしまった』と同等な勢いで『せっかくの休憩を邪魔してしまった』というのも、結構くるものがある。

麻衣子が自己嫌悪に陥っていると、ふいに背後で人の気配がした。

「え？ もしかして、……麻衣子？」

どこか懐かしい声でそう呼ばれ、麻衣子は振り返った。

視線の先には、見たことのある男性が驚いた顔で固まっていた。

しかし、どこで見たかまでは思い出せない。

すらりと伸びた身長も、引き締まった身体も、短く切りそろえられた髪の毛も、見覚えがあるけれど――

「俺だよ、俺。湯川！」

「え？ ……あ、昂史さん!？」

名前を言われて初めて、彼の正体に思い至る。

そう、彼は麻衣子が高校生の時に数か月間だけ付き合い合った、湯川昂史その人だった。

「まじかー！ こんなところで会うなんてな！」

付き合い合っていた頃と変わらない気さくな笑顔で、彼はそう言いながら近づいてきた。

笑った時の笑窪も、人懐っこい大型犬のような容姿も当時と変わらない。付き合い合っていた頃と比べて少し貫禄はついているが、変化といえばそれぐらいだ。

「十年以上は経ってるよな。ほんと、久しぶり！」

「ははは……お久しぶりです」

麻衣子は苦笑いで彼の登場を受け止めていた。

彼とは確かに付き合ってはいたが、いい思い出があまりない。

いや、もしかしたらあったのかも知れないが、最悪な別れ方をしたせいで彼に関する思い出はすべて嫌なものへと変換されていた。

昂史はひょうきんで面白い人間だがデリカシーがなく、そんな彼と付き合ううちに麻衣子は男性と付き合うこと自体に抵抗を感じるようになった。

友人として付き合うにはいい人だとは思いますが、恋人としてはもう二度とごめんである。

昂史は何年経っても変わらない人懐っこい笑みを見せた。

「もしかして、麻衣子はここに勤めてるのか？」

「いや、それは……」

「失礼ですが、貴方は？」

ぐっと肩を抱き寄せられたかと思うと、頭上に直樹の低い声が降ってきた。

見上げたところ、直樹の機嫌の悪そうな顔がそこにある。

両肩に感じる彼の体温に、麻衣子の身体は緊張で硬くなった。

昂史は明らかに不機嫌な直樹に気づいていないのか、笑顔で名刺を差し出してくる。

「あ、芹沢コーポレーションの湯川です。ちょうど近くで仕事がありまして、少し早いと思っただけですが立ち寄らせていただきました」

そして、そのままのカラツとしたテンションでこう続けた。

「もしかして、二人つてそういう関係なんですか？ 恋人？ もしかして、夫婦だったり？」

無遠慮なその台詞に、体が熱くなる。

しかし、直樹はまったく動じることなく「夫婦です」と簡潔に返した。

その肯定が嬉しくて、麻衣子の頬はわずかに緩む。

『夫に会いに会社まで来た妻』という関係と状況を理解した昂史は、にやりと下衆っぽい笑みを浮かべて二人にまた近づいた。

「じゃあ、もう麻衣子の秘密も……」

「昂史さんっ！」

麻衣子は慌てて昂史の口を押さえた。

先ほどまでの幸せな表情が一転、彼女の顔は強張っている。

眉根を寄せたのは直樹だった。

「秘密？」

「直樹さんは気にしないでください！」

麻衣子は赤ら顔で首をぶんぶんと振る。

その様子が気に入らなかつたのか、直樹の目はどんだん据わっていく。

「麻衣子さん、彼との間に俺に言えない秘密でもあるんですか？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど……」

「なら、教えてください」

「い、嫌です！」

若干涙目になった麻衣子がそう叫ぶ。

この秘密を昂史に馬鹿にされたことがきっかけで、麻衣子と彼は別れたのだ。

彼女にとってはトラウマものの『秘密』である。

麻衣子の手を自分の口から外した昂史は、そんな二人の様子を見て「ふーん」と余裕の笑みで頷いた。

「つまり、まだ綺麗きれいな関係ってことなんですね」

「ちよっと！」

「わかったわかった。もう言わないから、口押さえるのはやめろよ」

付き合っていた時のような気さくな態度で、彼は麻衣子を追い払う。

麻衣子も付き合っていた頃を思い出し、彼に対する遠慮がなくなっていた。

「ほんともう、そういうところ昔から全然変わらないんだから！」

「悪かったって。それにしても麻衣子はずいぶんと変わったな。昔はあんなにしおらしくったのに。今みたいに怒ったのだったって別れる直前だけで……」

「あれは、年上の昂史さんに気を遣ってたんですよ！ 本当なら——」

「別れる？」

直樹の眉がピクリと反応する。

その呟きに返したのは昂史だった。

「ああ、俺……私たち、昔付き合ってたんですよ。元カレ、元カノってやつです」

取引先の相手だからか『俺』を『私』に言い換えて、昂史は笑う。

麻衣子にしてみれば、もっと気を遣うところが別にあるだろう！ と思うのだが、デリカシーのなさはいまだ健在のようで、彼は悪びれもしない顔で続けて爆弾を落とした。

「でも、夫婦なのにまだあの秘密を知らないのか……。……つまり、私のほうが麻衣子を知ってるってことですね！」

「は？」

「昂史さん！」

麻衣子が叫び、直樹の顔が険悪どころか邪悪になったところで、昼休憩終了を知らせるチャイムがロビーに鳴り響いた。

その夜、麻衣子は夫婦になって初めてのピンチを迎えていた。

「麻衣子さん、『秘密』ってなんですか？」

背中には壁、正面には直樹という位置に正座し、麻衣子は頬に冷や汗を流していた。

両サイドには麻衣子が逃れられないように直樹の手が置かれており、少女漫画に出てくる壁下のような格好になっている。

不機嫌さを露わにしている直樹の顔に、麻衣子はいつもとは違う意味でドキドキした。なんだかもうドキドキというよりはドキドキといった感じである。

「い、言えませんか！」

「……なぜですか？」

「言えないからです！」

バレルならともかく、自分で言うのは気が引ける。

それに、昂史は『秘密』という言葉を使ったが、そんな大げさなものではないのだ。

隠していて日常生活に支障をきたすようなことではないし、人によっては気にしないことかもしれない。現に麻衣子だって昂史に指摘されるまで、そのことに思い至らなかつたぐらいだ。

直樹は麻衣子に、ぐっと身体を近づける。

彼のうしろでは、でき上がったばかりの夕食がホカホカと湯気を上げていた。

食事よりも麻衣子の秘密が気になる様子になる直樹である。

「俺と君は夫婦でしょう？　なのに、なんで俺が知らないことを彼が知ってるんですか？　納得いきません」

「そう言われましても……」

「もしかして、その秘密をネタに脅されてるわけじゃないですよね」

「脅されてはないです。そもそも、今日会ったのだって十数年ぶりなんですよ」

「それなら、これから脅されるかも……」

「さすがにそれはいいですよ」

話の方向性が徐々にずれてきているのを感じつつも、麻衣子はそう返す。

昂史はデリカシーのない男だが、そんな陰険なことをする人ではない。

彼は、無邪気に人を傷つける天才なだけだ。

「わかりませんよ。時間は人を変えますからね」

「見た感じ変わってなかったですけどね」

「いつそういうことになってもいいように、ICレコーダーを今度から複数台持つておきましょう。スタンガンと防犯ブザー、警棒も必須ですね」

「必須？　それはもしかしくとも、私が持つてことですか？」

「あたりまえでしょう。俺が持つていても仕方ありませんからね。今日中に注文して、明日には届くようにしておきますね」

何事も慎重なのは結構なことだが、無駄な行動力はいらないうと実感する麻衣子である。だからといって嫌いになるわけではないのだが、もう少し手加減してもらえるとありがたい。

その状態で職務質問にかけられた日には、捕まるのは麻衣子のほうである。

直樹は心配症のギアを上げたまま、さらに続ける。

「麻衣子さん、今度から帽子とマスクとサングラスをして外に出るように！家の鍵も増やしておきましょうか。あと一つ……二つは欲しいですね。防犯カメラも付けたほうがいいでしょうか？」

「いっただい彼は、どんな嚴重装備を付けるつもりなのだろうか。そもそも、鍵を増やしたり防犯カメラをつけたりだなんて過剰な防犯を、このマンションの管理会社が許してくれるかどうかもわからない。」

「とうい、念のため半年は外出を控えてくれませんか？もしなにかあった場合のことを考えたら……」

「なにもないですから、とりあえず落ち着いてください!!」



鍵を増やすのではなく、防犯性の高いものに付け替えるという折衷案で、直樹を納得させたその数日後。

麻衣子は雑貨屋に卸す作品のデザインを確認するために会うことにした結花と、一緒に昼食を取っていた。場所はいつものカフェである。

今日はこのまま結花と夕食も食べる予定になっていた。

夕食はいつも家で直樹と取るのだが、今日は珍しく会社の送別会に参加する予定になっている。だから、ちょうど会う予定になっていた結花を、先ほど夕食に誘ったのである。

麻衣子は結花に昂史と再会したこと、数日前のことを話していた。

「あははは！最高!!直樹さん、ホント最高!!」

「もー、笑い事じゃないんだから!」

目尻に涙を溜めながら大笑いする友人に、麻衣子は頬を膨らませる。

「いやー、ホントどうしてそういう思考回路になるのかわからないわあ。心配症も極まると大変ねー」

「だから、笑い事じゃないんだって！危うく家の鍵を五個にされるところだったんだよ？しかも、監視カメラ三台付き!」

いかに麻衣子が直樹のことが好きで、彼に甘いと言っても、譲れるところには限界というものがある。

もし、麻衣子が一人でこのマンションに住むのなら、まず鍵の付け替えなんて考えない。オートロックがある上に、マンションの管理会社が住居人が変わるたびに鍵を付け替えてくれているのを知っているからだ。監視カメラなんて、もつてのほかである。

しかし、防犯を強化したいと言う直樹の主張を全部押しつけるわけにもいかないので、鍵の付け替えだけは了承した。

つまり、それでも結構譲歩しているほうなのである。

「まあ、確かにそれは笑い事じゃないけど。でも、愛されてるって感じしない？ 結局、それって全部麻衣子のためでしょう？」

「それは、そうなんだけどね……」

「なによ、煮え切らない返事ね」

目を瞬かせる結花に、麻衣子は苦笑いを零した。

思い出したのは、数日前の夕食時の直樹とのやり取りだ。

その日にした結花との会話が原因で食事中に呆けていた麻衣子は、直樹に体調が悪いのではないかと疑われ、寝室に運ばれた。

もちろん体調は悪くなかったのだが、直樹の強引さに、抵抗むなしくベッドに寝かされる羽目になった。

そこで『なにか欲しいものはありますか？』と聞いてきた直樹に、麻衣子は思い切ってキスをねだったのだが……

「結局、額にキスされただけで終わったと」

「うん」

麻衣子は納得がいけないという顔で頷いた。

「まあ。その場合、普通唇にするわよね。麻衣子が勇気ふり絞ってるわけだし」

「そう、よね」

他から考えてもそうなのかと、麻衣子は落ち込んで頭を下げた。

「もしかして直樹さん、私とそういうことしたくないのかな……」

それならば、寝室が一緒ながらまったく手を出してこないことにも頷ける。

結婚してみた方がいいが、麻衣子に対してまったく食指が動かないとか、そういうことなのかもしれない。

二人の出会いが雑貨屋だが、結婚するきっかけはお見合いだ。

きっかけがどうあれ、互いに想いあつて結婚したという事実は変わらないが、二人とも両親に急かされて結婚を決めたという面もある。

もしかしたら、表情には出さないものの、直樹は結婚を急ぎすぎたと後悔しているのかもしれない。

そこまで考えて、ずーんと気が沈んだ。

「ま、ただ単に気分じゃなかったからって可能性もあるわよ。気にしなくてもいいんじゃない？ それに、風邪をうつされたくないって思ったのかもしれないし」

「そう、なのかな」

「そうそう！ こういうのは気にするだけ無駄よ！ もしかしたら、こう、がーっと急に襲ってくるのかもしれないし！」

「それはそれで……」

麻衣子は困りながら笑う。けれど、からりと笑う結花を見ていると元気が出てきた。こういう時の彼女は本当に助けになる。

「あ、そうだ。湯川って名前前で思い出したんだけど、麻衣子って同窓会いくの？」

「うーん。ちよつと悩み中」

ちよつと昨日、昂史の妹で友人の沙百合からメッセーリアプリを経由して、二人を含む同窓会のグループの元に同窓会の案内が届いていた。開催は一か月後。場所は地元の大きなホテルの宴会場になっていた。

麻衣子の実家の近くなので、今住んでいるところから電車で四十分ほどはかかる。

もしも行くのならば、その日は実家に泊まったほうが良いだろう。

メッセーリアプリの返信を見る限り、結構な人数が参加予定のようだった。

「沙百合には会いたいんだけど、昂史さんには会いたくないんだよね……」

イベントが大好きな昂史のことだ。妹の送迎にかこつけて、同窓会に参加してくる可能性は十分ある。そうなれば、あのノンデリカシー大王の口からなにが飛び出すかわかったものじゃない。

それに、昂史と再会した時、直樹は嫌そうな顔をしていた。

彼を心配させてまで行くメリットが同窓会にあるのかと聞かれたら、首を捻るほかない。

「やっぱり、やめとこうかな。別に同窓会に参加しなくても、会いたい人には会えるしね」

「そっかー。麻衣子が行かないのなら私も行くのやめようかなー」

背中を伸ばしながら、結花は首を捻る。

彼女は同窓会を楽しみにしていたはずだ。

メッセーリアプリの返信にも、いの一に答えていた。

「ええ。結花ちゃん楽しみにしてたじゃん」

「そうなんだけどねー」

「なら、行っておいでよ！ 私のことは気にしないで良いからさ！ 帰ってきたら、いろいろと話聞かせてくれたら嬉しいな！」

屈託のない麻衣子の笑顔に、結花は「じゃあ、そうしようかしら」と笑みを浮かべた。



隣の人間の声も聞こえないほどの喧噪の中、直樹は一人ビールのグラスを傾けていた。

目の前には、赤ら顔で芸人のもまねをする同僚と、それを見て笑う上司。周りの人間たちは、はやし立てるように手拍子を打っていた。

両隣には、妙に身体をくつつけてくる女性たち。

さつきまでは確か両隣は男性だったはずなのだが、いつの間に入れ替わったのだろうか。

「こうさかさあん。まだビールですかあ？」
「こっちの、赤ワインも美味いですよお」

甘えた声で身体を押しつけられる。

腕に胸が当たるが、なんとも思わなかった。

彼にとつて、麻衣子のものでなければ、胸などただの贅肉だ。

直樹は鬱陶しく思いながら、短く息を吐き出す。

「遠慮しときます」

「こうさかささん、つめたいー！」

「こういう場なんですから、交流しましょうよ！ 交流！」

直樹は営業部で『鬼の高坂』として恐れられている人間だ。しかし、それも営業部に限つての話。他部署の女性たちから見れば、彼は顔もルックスも良くて仕事ができる、ただの優良物件なのである。

ついでに言うなら、彼女たちは直樹の面倒な性格も知らないのだ。

麻衣子と結婚してから、こういうあからさまなアプローチは減ってきたのだが、やはり酒が入ると多少緩んでしまうらしい。

それともお酒が入っているからこそ、ワンナイトラブぐらいならばあり得ると思っっているのだろうか。

「こうさかささんー。そーいえば、ご結婚されたんですよね。おめでとうございますう」
「結婚式つて営業部の方しか呼ばれないんですよね？ 私も行きかけたあ！ 写真、楽しみにしていますねー」

このままでは直樹の興味が引けないと思つたのか、女性たちは話題を変えてきた。

話が結婚のことに触れ、直樹は片眉を上げる。

「奥様つてどんな人なんですかあ」

「いつ、どこで知り合つたんです？」

その質問に直樹は短く「お見合いです」とだけ返す。

彼女たちに雑貨屋での出会いのことなど話してもしょうがないだろう。

直樹の答えに、両隣の女の子たちは小さく悲鳴を上げた。

「えー！ 高坂さん、なんでお見合いなんかしちゃったんですかー！ お見合いなんかしなくても、いくらかでも相手見つけられたじゃないですか！」

「うちの部署でも、高坂さん良いなって人多いですよ？」

「なになに？ なに盛り上がったの？」

女性たちの甲高い声に、今度は噂と女好きで有名な広報部の白鳥が輪に加わる。

「高坂さんの結婚相手、お見合いで知り合つた人らしいですよ！」

「それ俺も聞いたわ。なんか、互いの両親が知り合いとかだったんだろ？」

「えー、なにそれ！ ずるーい!!」

なにがずるいのかまったくわからないが、直樹の左側に座る女性は不満げに口をへの字に曲げた。
「高坂さん、結婚相手に不満とかないんです？」

「不満なんてありませんよ」

直樹は、はっきりと言い切る。

反応が返ってきたのが嬉しかったのか、彼女たちの声は少し高くなった。

「うっそー!」

「そんなこと言いつつも、少しはありますよね？ 無理矢理結婚させられたんだし!」

どうやら彼女たちの中で『お見合い⇨望まぬ結婚』という図式が完成しているらしい。

少々うざったく感じてきた直樹は、ビールの入っているグラスを持ったまま立ちあがる。

「彼女に不満なんてありませんよ。……それでは、俺は少し静かなところで飲みたいので、失礼しますね」

もう、席の場所なんてあつてないようなものだ。現に、彼女たちも白鳥も、どこから来たのかわからない。

去って行く直樹を見ながら、女性たちは「もう、ああいうクールなところがいいのよね!」「奥さん、めっちゃ羨ましい!!」と声を上げていた。

「でもさ。聞いた話んだけど、あいつ奥さん以外に……」

どうせまた根も葉もない噂を垂れ流しているのだろう。

白鳥の声を背中で聞きながら、直樹はそのまま比較的人の少ないところへ移動した。

店の中央付近では、先ほどからずっと変わらず同僚たちが騒いでいる。

店を貸し切りにしての送別会だからいいものの、他に客でもいればクレームにつながっていた案件だろう。

直樹は端のテーブルに移動し、息をついた。

「はあ。……帰りたい」

先ほど結婚の話題が出たからか、頭に麻衣子の顔がちらついて離れない。元々飲み会自体もそんなに好きではないのだ。

今日だって、お世話になった先輩の送別会だから参加しただけで、ただの飲み会ならば絶対に断っていた。

グラスが空になったので、ビールを追加で頼む。すると、注文を間違えたのか、手元に日本酒のグラスがやってきた。

飲み放題のプランなので、なにを飲もうが値段が変わることはない。なので、店員になにか言うことなく、直樹は黙ってグラスに口をつけた。

すると、あつという間に身体がかつかと燃えるように熱くなってくる。

「のんであるかー?」

聞き慣れた声が出て、隣に誰か腰掛ける。

見れば、赤ら顔の香川が隣に座っていた。手にはビールを持っている。

「こーさか！ たのしいかー？」

呂律ろれつの回らない香川は、直樹の肩をバシバシと叩く。

昔から酒はのむよりのまれるタイプの彼だが、今日は特に酷いらしい。このままでは、家に連れ帰る役目を負わされそうだと、直樹は内心ため息をついた。

（今日は早く帰りたいのに……）

「そーいやー、芹沢コーポレーションの湯川となんか揉めたんだって？」

湯川という名前に、直樹の眉はピクリと反応する。

数日前のあの出来事は、忘れてくても忘れられない。

麻衣子と彼の間の秘密というのも気になるし、仲の良さげな二人の様子も気になる。

もしかして、二人のよりが戻るんじゃないかという不安は常に拭い去ることなどできず。ただ、

麻衣子に直接『彼とよりを戻そうだなんて考えていませんよね？』なんて聞くのも女々めめしすぎるような気がして聞けなかった。

「奥さんが湯川の元カノとかなんだろうー？」

「……なんで知ってるんですか？」

「さつき、受付の子に聞いたんだよー」

彼が指さす方向には盛り上がる女性たちがいた。

湯川と受付前でやりあったがために、一連の出来事は彼女たちにバツチリ見られてしまったらしい。

どうやら、良い噂の種を与えてしまったようだ。

直樹は香川に視線を戻した。

「別に、揉もめていませんよ。ただ少し……話をしていただけです」

実際、本当に揉もめていたわけではない。

あれから少し仕事の話をしたのだが、湯川も機嫌を損ねたふうではなかった。

「でも、まあ。きいーつけるよー」

「気をつける？ なにをですか？」

「芹沢コーポレーションの湯川って、あんまり良い噂聞かないからな」

香川はビールを啣ある。

「聞くところによると、女は常にとつかえひつかえだし。過去に付き合っていた女の裸の写真なんかを保存しておいて、やりたい時に呼び出すとかって。ああいうのなんつったっけ……確か、リベンジポルノって……」

「は？」

思わず、持っていたグラスをテーブルに叩きつけてしまう。

中に入っていた日本酒が、その衝撃で飛び散ったが、そんなことに頓着してられる程の冷静さは直樹にはなかった。

「それ、本当ですか!？」

「いや、ただの噂だからなんともなあ。ただ、女からの評判がめちゃくちゃ悪いのは確かだ。特に一度付き合った相手からの好感度は死ぬほど低いらしい」

「それはどこからの情報ですか？」

香川はまた、あの盛り上がりつつある女性陣を指さす。

「彼女の友達が湯川と付き合ってたんだってよ。んで、そういう噂を聞いたって」

少し酔いがさめてきたのか、先ほどよりはすっかりとした口調で香川は続けた。

「奥さん、本当に湯川の元カノならそういう危険があるかもしれないぞ。お前がついていけば心配ないと思うけど、一応注意してみてもやれよ。なにかあってからじゃ遅いんだからな」

直樹の表情は、みるみるうちに強張っていく。

麻衣子はどちらかと言えば、迂闊な人間だ。騙されやすそうだし、騙されても気づかないなんてこともあるだろう。

香川は、直樹が慎重な人間だから、結婚相手にも慎重な人間を選んだと思っているかもしれないが、彼が麻衣子を選んだのは、彼女が自分にないものを持っているからだ。麻衣子が慎重だなんてとんでもない。

「ま、特にこういう夜は心配だよな」

「……なにがですか？」

「いや、だって旦那が飲み会の夜なんて、間男にはうってつけの夜だろ？」

香川は本当に軽口で言ったのだろうが、直樹はその言葉に心臓が止まる思いがした。

頭の中に、麻衣子と昂史の『秘密』が浮かび上がる。

もしかすると、その『秘密』というのは……

そこまで考えて直樹は無言で立ち上がる。そして、隅に置いてある鞆かばんを手を取った。

「おい。どこに行くんだ？ まだ送別会は……」

「帰ります」

「は？」

「緊急の用事ができました。帰らせていただきます」

そう簡潔に告げて、直樹は周りの人間が止める間もなく店を後にした。



「ところでさ、昼間の話の続きなんだけど。直樹さんどうこうなりたいなら、自分から仕掛けてみれば？」

「へ？」

突拍子もない話に、麻衣子はひっくり返った声を上げる。

二人は夕食にと、近くのバーに来ていた。バーといっても、お酒だけでなく簡単な食事も提供してくれる、比較的入りやすいところだ。

「今度は、して欲しいって言うんじゃないかと、自分からしてみるのよ！」

「へ!? いや、でも……」

結花の言葉に麻衣子は狼狽えた。

男性経験がほとんどゼロに近い麻衣子が自分から直樹になにかするなど、考えられないことだった。

「なに恥ずかしかつてるのよ！ 最近は女も肉食じゃないと生きていけないわよー！」

「結花ちゃんみたいに可愛かったらそうなんだろうけど……」

友人である結花は可愛い。

きめ細かい肌、華奢な体躯。大きな瞳に対して小さくて上品な唇。

黙っていれば人形と見紛うばかりの可愛らしさだ。

にもかかわらず、自分の可愛らしさをひけらかしたりなどしないし、性格も良いので、女性にも男性にもどちらにも平等に好かれるという希有な存在である。

そんな彼女にガンガン攻められたら、そりゃ男の人だってひとたまりもないだろう。

どこもかしこも十人並みの自分とは違うのだ。

「こういうのは、可愛い、可愛くないの問題じゃないのよ！ 私たち女性が男性に求めてほしいと思ってるのと同じように、男性だって好きな人に求められたら思って思ってるんだから！」

「そういうもの？」

「少なくとも、私はそうやって旦那をオトしたわよ」

「結花ちゃんって昔から肉食だよー……」

彼女は大学生から付き合っていた彼と、三年前に結婚して仲良く暮らしている。彼女の夫もそれはもうモテ男で、二人が付き合いだした当初は『美男美女カップル』と周りから騒がれていた。

正直、こんなに造形の整っている彼女なら、肉食にならなくても相手が寄って来ただろうにとは思っ。

「でも最近、アイツちよつと帰りが遅いのよねー」

「そうなの？」

「もし他に女でも作ってたら、ただじゃおかないんだから！」

結花は拳を作りながら、そう言う。

「で。話は戻るけど、やっぱり求められたいなら求めなきゃ！ キスでもしたら、こう、がばーつと襲ってくれるかもしれないわよー！」

「だから！ 別にそこまでは求めてないんだってば!!」

「あら、そうなの？ でも、今よりもっと仲良し夫婦になれるかもよ」

「そう、かなあ……」

「そうそう！ 麻衣子、がんばー！」

「うーん……」

麻衣子がそう洪つていると、突然背後で乱暴に店のドアベルが鳴った。様子が気になって振り向こうとした瞬間、腕を取られ、悲鳴を上げそうになる。

しかし――

「……こんなところに、いましたか」

その必死さの滲んだ声を聞いた瞬間、麻衣子の悲鳴は喉の奥に引っ込んだ。椅子に座ったまま見上げると、額に汗を浮かべる直樹の姿がある。

「え、直樹さん？」

「心配、したん、ですよ」

肩で息をしながらそう言い、直樹はその場で呼吸を整える。

「どうして……。今日、送別会でしたよね？」

「麻衣子さんが心配で、早く帰ってきたんです。そうしたら君が家にいないから……」

「ごめんなさい。でも、結花ちゃんと夕飯も食べるかもしれないって、今朝言いましたよね？」

「は？」

聞いたこともないような間拔けな声を出して、直樹は固まる。

そうして、そのまましつかり三十秒は逡巡したかと思うと、頬を引きつらせながら頭を押さえた。

「……言っていましたね。そういえば」

珍しい反応に、麻衣子は思わず噴き出した。

「ふふっ、直樹さんでも、そういうことあるんですね」

「そりゃありますよ。人間ですからね」

ふてくされたような直樹に、麻衣子は肩を揺らした。

直樹の視線は麻衣子から奥に座る結花に移る。

視線を感じた結花は、飲んでいたカクテルをテーブルに置き、手を挙げた。

「直樹さん、お久しぶりです」

「お久しぶりです。すみません、お邪魔してしまっただけ……」

直樹は申し訳なさそうにため息をついた。

結花はそんな直樹を笑い飛ばす。

「いいんですよ。ちょうどそろそろお開きにしようって話をしてたところでしたし！ ね、麻衣子？」

子？」

「え？」

「私が麻衣子を家まで送ろうと思っていたので、その手間が省けてむしろ良かったです」

「……結花ちゃん」

優しい気遣いに、だから彼女は人に好かれるのだと麻衣子は納得した。

結花は鞆かばんを持って立ち上がる。

「それじゃ、私帰るわね。……今晚、チャンスがあつたら、頑張つてね」

最後の言葉は、麻衣子の耳にだけ囁ささやかれた。

その瞬間、顔が真っ赤になる。

「もうっ！」

「ふふふ。また連絡するわね！」

からっとした態度で、彼女はそう言つて二人を残し店を後にした。

バーからの帰り道、二人は並んで歩いてた。手などはつないでおらず。けれど、肩が触れ合うか触れ合わないかぐらゐの付かず離れずという距離を保つてた。

麻衣子は直樹を見上げる。

「あの。一つ聞いて良いですか？ どうして私の居場所がわかつたんですか？ あのバーつて結花ちゃんの提案ていあんで急遽きゅうきょ決まつたところだから、場所とか伝えていませんでしたよね」

「それは、GPSですよ」

「jeepeeえす？」

麻衣子は目を瞬またたかせながら、直樹の言葉をオウム返しした。

「麻衣子さんがいつ何時行方不明になつても良いように、常にスマホで位置情報がわかるようにしているんです。それと、スマホの充電が切れた時用にと、その鞆かばんにも小型のGPSを仕込んでます」

「……GPSつて、やっぱりそのGPSなんですわね」

「他にどんなGPSがあるんですか？」

「いや、まさか常に位置情報を把握はあくされているとは思わなかつたもので」

やましいことはないので別にいいが、少し呆あはれてしまう麻衣子である。

心配症だとは思っていたが、さすがにここまでだとは思っていませんでした。

「別にプライベートを監視しようとは思っていませんよ。もしもの時の安全装置です」

「安全装置……」

呆まうける麻衣子に、直樹は振り返る。

「それなら俺からも聞きますが、麻衣子さんはなんで俺のお願いした物をつけてないんですか？ 帽子は？ マスクは？ サンングラスは？ スタンガンと防犯ブザーと警棒は、ちゃんと鞆かばんに入つてますか？」

「防犯ブザーは入れてますけど、スタンガンと警棒は家です」

「なぜですか？」

「いや、帽子とサングラスとマスクした女が、スタンガンと警棒を持っている時に職質されたら、問答無用で警察署にゴーですよ！」

「万が一のことが起こるよりは良いでしょう」

「普通に嫌ですよ！ 外出るたびに毎回警察署行くの」

自分の感性のほうが一般的だと思うのだが、直樹があまりにも不思議そうな顔で首を捻るので、自分が間違っているのではないかという気分になってくる。

「それに、サングラスもマスクも帽子も嫌です。ファッションはちゃんと楽しみたいです」

「……わかりました。でも、スタンガンぐらいは持ち歩いてください」

「ぐらい、じゃないですよ。それに、あれ大きいですし……。よくドラマで犯人が持つてるサイズのやつじゃないですか」

「それなら、今度は小さいのを探しておきます。確か、防犯ブザーと一緒に買ったものがあつたよ
うな……」

「……どうしても持たせたいんですね」

「あたりまえじゃないですか」

こちらを向いた直樹と目が合う。

それがなぜか無性におかしくて、麻衣子が思わず噴き出すと、つられたように直樹も笑い出した。
二人して肩を揺らして笑う。

夜も遅いからか周りには人はいなくて、笑っている二人を見ているものはいなかった。

小指の先が触れる。

直樹の小指をなんの気なしに握れば、今度は彼から手を握り返してきた。

つながった体温に、心臓が高鳴る。

笑い声もいつの間にかなくなっていた。

静かな雰囲気二人は手をつないで歩く。

何か月も一緒にいるが、手をつないで歩くなんて、考えてみれば初めてだった。

もしかしたら、今が結婚して一番良い雰囲気なのかもしれない。

これがチャンスというやつだろうか。

「あ、あの。直樹さん」

「はい？」

麻衣子は立ち止まる。すると彼も同じように立ち止まり、首をかしげた。

彼の手を握ったまま、少したばこの香る背広をもう片方の手で掴んだ。

そして、踵をあげる。

一瞬だった。

ちゅっと、軽いリップ音が暗い道に溶け込んでいく。

麻衣子はゆでだこのように顔を真っ赤に染めたまま、彼から離れた。

(しちゃった、しちゃった、しちゃった!!)

真っ赤になってうつむくと、その頭上に直樹のため息が落ちてくる。

「麻衣子さん、……ここは外ですよ？」

思った以上の冷たい声に、麻衣子は慌てた。

「で、でも、今は誰も見ていないですし！」

「それは、関係ないでしょう」

「そう、ですよね」

怒っているわけではないが窘めるような声に、麻衣子は羞恥と後悔でますますうつむいた。

良い感じの雰囲気、少しはしゃぎすぎていたらしい。

直樹はいつもより深く眉間に皺を寄せて、麻衣子の手を放した。

「あ……」

「今後は、こういうことをしないでください」

「こういうこと？」

「こういうことです」

直樹は自身の唇を親指で拭う。すると、親指に麻衣子の口紅がついた。

「わかりましたか？」

「あ……はい」

麻衣子の返事を聞き、直樹はスタスタと一人前を歩いて行ってしまふ。

手にはもう彼の体温など残っていなかった。

先ほどまであんなに楽しかったのに、キス一つで状況は一転してしまった。

(キス、してくるなんてことだよね……)

彼の背中を追いかけながら、麻衣子はむなしさと悲しさでいっぱいになっていた。